

■出演者プロフィール



© 金子カ

指揮: **飯守泰次郎** Taijiro Iimori, *Conductor*

桐朋学園で学んだ後、ヨーロッパで研鑽を積み、ハンブルク州立歌劇場などの指揮者を歴任、オペラ指揮者として確固たる実績を築き上げる。1970年からはパイロイト音楽祭の音楽助手として数々の歴史的公演に加わり、当時パイロイト・フェスティバル総監督であったヴォルフガング・ワーグナー氏から絶大な信頼を得た。1990年代より国内での活動を再び活発化させ、名古屋フィル常任指揮者、東京シティ・フィル常任指揮者、関西フィル常任指揮者、新国立劇場オペラ部門芸術監督を歴任。古典派からロマン派にかけてのレパートリーを根幹に、意欲的な活動を展開。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者、東京シティ・フィル桂冠名誉指揮者、関西フィル桂冠名誉指揮者を務める。これまでに2010年11月旭日小綬賞、2012年度日本芸術院賞、2014年度第56回毎日芸術賞などを受ける。また、2012年度の文化功労者に、2014年12月には日本芸術院会員に選ばれた。

■オーケストラ・プロフィール

東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団 Tokyo City Philharmonic Orchestra

【創 設】

1975年、自主運営のオーケストラとして指揮者・堤俊作を中心に

若く才能ある演奏家たちによって設立。

【指揮者】

高関健(常任指揮者)、藤岡幸夫(首席客演指揮者)、飯守泰次郎(桂冠名誉指揮者)、
芥川也寸志、黛敏郎(以上、永久芸術顧問)、森正(永久名誉指揮者)、堤俊作(永久桂冠指揮者)

【楽団員数】

56名

【ホーム・コンサート・ホール】

東京オペラシティコンサートホール、ティアラこうとう

【楽団ウェブサイト】

<https://www.cityphil.jp/>



Festa Summer MUZA Kawasaki 2020

フェスタサマーミュージア KAWASAKI 2020

ミュージア川崎シンフォニーホール

サマーミュージアは全公演ライブ配信を実施しております。客席内と舞台上に映像収録カメラが入りますので、予めご了承ください。

東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団

Tokyo City Philharmonic Orchestra

巨匠が振るドイツ音楽の至高

8/7金

曲目

ワーグナー: 歌劇「タンホイザー」序曲

(15分)

Wagner: "Tannhäuser" Overture

—休憩(20分)—

ブルックナー: 交響曲第4番 変ホ長調 WAB104「ロマンティック」(ハース版) (60分)

Bruckner: Symphony No. 4 in E-flat major, WAB 104, "Romantic" (Haas Edition)

第1楽章 躍動して、速すぎず

第2楽章 アンダンテ・クワジ・アレグレット

第3楽章 スケルツォ: 躍動して — トリオ: 速すぎずに、いかなる場合も決してひきずらないで

第4楽章 フィナーレ: 躍動して、しかし速すぎず

※演奏時間は目安です。

出演

指揮: **飯守泰次郎**(桂冠名誉指揮者)

コンサートマスター: **戸澤哲夫**(コンサートマスター)

※出演者・公演内容につきましては変更が生じる場合がございます。

⚠ 新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、ご協力をお願いいたします。

【お客様へのお願い】

※マスク着用、手指消毒にご協力ください。

※終演後は、スタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いている扉から混雑を避けてお帰り下さい。

※出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。

※万一、クラスター(感染集団)の発生が明らかになった際、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

【館内設備について】

※クローク、ドリンクコーナー、ショップの営業はございません。

※冷水器の使用は停止しております。

※換気のため、通常よりも空調を強めにしております。また、隣席を空けているため、普段よりも寒く感じる場合がございます。(ブランケットの貸し出しは中止しております)

※アンコール曲は公演後、当ホールホームページに掲載いたします。

ご登録をお願いします

神奈川県 LINE コロナお知らせシステム

会場内に掲示しているQRコードを読み取ってください。新型コロナウイルスに感染された方が発生した際、保健所の調査上必要と判断された場合にLINEメッセージが届きます。

※来場日ごとに、QRコードの読み取りをお願いします。

ホール内は小さな音でもよく響きますので、ご協力をお願いいたします



演奏中の入退場はご遠慮ください。



全席指定の公演です。ご自分のお席でお聴きください。



ホール内客席では携帯電話、スマートフォンなど全ての電子機器の電源をお切りください。タブレット端末など光を発する機器も、周囲の方の鑑賞の妨げとなりますので、ご使用にならないようお願いいたします。



時計のアラーム・時報などは設定の解除をお願いいたします。



許可のない写真撮影、録音、録画は固くお断りいたします。



鈴のついたアクセサリ、お荷物などは演奏中に音が出ないよう、十分ご注意ください。また、アメの包み紙を開ける音にもご注意ください。



ホール内での飲食はご遠慮ください。



※曲が終わったとき、音が消えゆく余韻を十分に味わってから、拍手をお送りください。



【補聴器をお使いの皆さまへ】
補聴器が正しく装着されていることをご確認くださいませよう、お願いいたします。

主催: 川崎市、ミュージア川崎シンフォニーホール (川崎市文化財団グループ)

後援: 川崎市教育委員会、公益社団法人 日本オーケストラ連盟、J-WAVE 81.3FM、OTTAVA

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

映像・音響制作: YouClassics

協力: 株式会社東京MDE、エヌ・ティ・ティ・スマートコネクト株式会社

beyond
2020

音楽のまちかわさき

MUZA
KAWASAKI
SYMPHONY HALL

(2020年7月1日現在)

ドイツ音楽の第一人者がおくる 独逸ロマン派の雄大な名作の真髄

●本格化への決定打となった作品で二人の個性を聴く

本日演奏されるのは、ドイツが生んだオペラの巨匠リヒャルト・ワーグナー（1813～1883）と、オーストリアが生んだ交響曲の大家アントン・ブルックナー（1824～1896）の作品。両ジャンル史上屈指の壮大・長大な作品で名高い、独逸ロマン派を代表する個性的作曲家の組み合わせだ。

1845年に完成された「タンホイザー」は、ワーグナー自身「ロマン派オペラ」と名付けた作品。「楽劇」と呼ばれる超大作以前に書かれた“ロマンティック”な人気作である。

1865年にワーグナーと出会ったブルックナーは、熱烈な信奉者となり、1873年作の交響曲第3番を巨匠に献呈した（よって同曲は「ワーグナー」の愛称を持つ）。その直後に書き始められたのが今回の交響曲第4番「ロマンティック」。この曲は改訂を経て1881年に初演され、やがてブルックナーの早期の交響曲中、最大のポピュラリティを得ることとなった。

すなわち本日の2曲は両大家の上昇期を代表する作品。ブルックナーが受けたワーグナーの影響や両者の共通性、あるいは絶対的な個性の違いが浮き彫りにされる興味深いプログラムといえるだろう。

●壮麗な管弦楽で魅せる、オペラの巨人のロマン派的序曲

前半は、ワーグナーの「タンホイザー」序曲が披露される。「タンホイザー」は、1845年に完成され、同年ドレスデンで初演された、比較的初期の作品。一般的なオペラに近い構成ゆえに広く親しまれている。舞台は13世紀初めのチューリンゲン。「愛欲の女神ヴェーヌスのとりこになった騎士で吟遊詩人のタンホイザーは、歌合戦で官能を賛美して輦轡ひんしゆくを買い、懺悔の旅でも許されないが、乙女エリーザベトの身を犠牲にした祈りによって救済される」といった全3幕の物語である。

序曲は、オペラ全体を集約した内容。敬虔な「巡礼の合唱」の音楽が、官能的なヴェーヌスの世界を表した音楽を挟む形をとる。最初にホルンを中心とした「巡礼の合唱」の主題、続いてチェロによる「悔恨の動機」が登場。次第に力を増し、テンポを速めてヴェーヌスの世界に入る。「ヴェーヌス賛歌」を中心とした賑やかな場面が続いた後、「巡礼の合唱」が戻り、壮麗なクライマックスが形成される。

●大交響曲で名高い大家が残した、最も明快なナンバー

後半は、ブルックナーが残した11曲（0番と00番を含む）の交響曲の中でもポピュラーな第4番「ロマンティック」。旋律と構成とサウンドが明快で生き生きとした、ブルックナー入門にも最適な作品だ。

ブルックナーは、本格的にウィーンを拠として6年後の1874年1月2日、本作の創作を開始した。創作は順調に進み、同年11月22日に一旦完成。これが第1稿＝「1874

年稿」である。しかし改訂の必要性を感じたブルックナーは1878年に全面的な手直しを行い、第3楽章は全く別の曲に変えた。さらに1880年、第4楽章を大幅に改訂し、1878年改作の第1～3楽章と1880年改訂の第4楽章を合わせて、第2稿＝「1878／80年稿」を完成。1881年2月ウィーン・フィルによって初演された。なお本日も含めて、通常はこの第2稿で演奏される。

本作はブルックナー初の長調の交響曲であり、弦楽器のトレモロの「原始霧」にホルンが加わる通称「ブルックナー開始」や、「2+3連符」の「ブルックナー・リズム」（例：第1楽章の冒頭主題）が明確に打ち出されている。また「ロマンティック」のタイトルは、本人が手紙等で再三そう呼んでいることに拠るもの。しかも全楽章にわたって作曲者の言葉が残されており、第1楽章は「町の庁舎から1日の始まりを告げるホルン、生活の展開」、第2楽章は「歌、祈り、小夜曲」、第3楽章は「狩と、森での食事の間に手回し風琴が奏される様子」、第4楽章は「民衆の祭り」あるいは「楽しく過ごした1日の後に突然降り始めた夜の驟雨しゅうう」だという。どう受け取るかは自由だが、参考までに。

第1楽章は3つの主題を持つ壮麗で輝かしい音楽。冒頭のホルンの音型が全曲の核的な要素となる。第2楽章は短調の緩徐楽章。憂いに満ちた主題と葬送のリズムが印象的だ。第3楽章はブルックナーの全交響曲中唯一の2拍子のスケルツォ。「狩のホルン」の音型が耳を奪い、田舎舞曲レントラー風の間奏部も滋味を醸し出す。第4楽章はコーラージュ風のフィナーレ。様々な変化を加えながら、第1楽章の主題が登場して大団円を迎える。

■コラム

ブルックナーと版

ブルックナーにつきまとうのが「版」の問題。その根本的な要因は、彼の自己批判の強さと優柔不断な性格にある。自ら改作・改訂することもあれば、周りから批判されて書き直すこともしばしば。そこで「本来の意図」を巡る見解と版の相違が生じた。加えて、弟子等が勝手に割愛・変更した楽譜（改ざん版）が最初に流布したため、事はより複雑になった。

現在目にすることが多いのは、ハース版とノヴァーク版であろう。これらは自筆譜と出版譜（改ざん版）との違いを知った人々が、原典版の必要性を唱えるようになって生まれたもの。まず1930～44年、国際ブルックナー協会から最初の原典版（批判全集版）が出版された。これが当時の協会会長で編集責任者ロベルト・ハース（1886～1960）の名を冠する「ハース版」。そして第2次大戦後、ハース版を手伝っていたレオポルト・ノヴァーク（1904～1991）が協会会長に就任し、1951年から2回目の原典版を出版し始めた。こちらが「ノヴァーク版」である。両者の主な違いは、ハース版が“唯一の決定的な版”を企図し、他人から勧められた加筆は極力排除したのに対して、ノヴァーク版は“複数の稿の発表”を企図し、加筆も採用して細かな指示を増やした点にある。

実はより大きいのが「稿」の違い。これは概ね本人の意志に拠っており、曲によっては全く違った音楽に変わる。例えば第4番がそう。第1稿の「1874年稿」と通常演奏される第2稿の「1878／80年稿」は大きく異なり、第3楽章は完全に別の音楽だ。なお「1888年稿」も存在するが、基本的に改ざん版（異論もある）ゆえ、ここでは深入りしない。

本日の演奏は「1878／80年稿」に基づくハース版。同稿の場合、ノヴァーク版との差異は少ない。

（柴田克彦）